

寸言

日本飛行機株式会社
代表取締役社長
鈴木 伸一



日飛神社のこと

2010年の新春を迎え、当工業会の会員の皆様には平穏な1年とご家族の健康を祈願して神社やお寺に参拝された方も多いと思います。私も毎年必ずお正月の神社詣でをしている一人ですが、たまたま昨年3月、会社幹部と一緒に山形市内にある『日飛神社』（地元の方は日枝神社と呼んでいます）に初めて参拝する機会がありました。私自身、出かける前までは、現在神奈川県横浜市と大和市で操業を続けている当社の祠が一見縁も所縁もない山形になぜ現存するのか、正直言って半信半疑でしたが、実際に現地に行き、地元の関係者の方々からその祠と当社の関わりについてのお話を伺うことができ、私の疑問が氷解しました。この寸言の紙面をお借りして、この祠にまつわる当社の歴史の1コマと参拝の様子を紹介したいと思います。

太平洋戦争が始まる直前の昭和16年、当時の山形県財界関係者の熱心な工場誘致活動と海軍の飛行機増産要請を受けて当社は山形市に工場進出を決め、山形製作所を開設しました。敷地の広さは16.5ヘクタールもあり、さらに最盛期であった昭和19年当時には、練習飛行場も併設され従業員5,000名近くを擁する大工場となりました。ここでは通称「赤とんぼ」と呼ばれた九三式中間練習機、ドイツの「Me163B コメット」の概略資料を基に開発された木製の局地戦闘機「秋水」が製造されました。

冒頭に紹介した神社は山形製作所開設の際、工場の繁栄と安泰を祈願するため、東京の赤坂にある日枝神社のご神体のひとつを遷座して工場正門脇に「日飛神社」として祀ったのが由来です。戦後工場は閉鎖され

祠も放置されたままでしたが、地元関係者のご配慮で同じ山形市内の「鳥海月山両所宮」の境内に再度遷座され今日にいたっています。

参拝の後、境内の社務所にて両所宮の宮司さん、当時の山形製作所に詳しい郷土史家、当時製作所で製造に携わっておられた方々から親しくお話を伺うことができました。

「赤とんぼ」のリブは木製であったとか、「赤とんぼ」は通常月産40機であったが最盛期には80機までいったとか、興味深いお話ばかりでした。私が特に感銘を受けたことは、戦後、製作所が閉鎖された後、飛行機作りで腕を磨いた技術・技能を生かして家具製品等、別の分野に進出し、現在も地元深く根ざした企業の経営者としてご活躍されている方も何人かおられるとのこと、さらには当社の山形への工場進出に再度期待しておられる方もいて、「山形に来ていただければ、1,500m級の滑走路を提供します」とまでおっしゃる方もおられました。（本音を言えば、今日のジェット機ではせめて2,500mくらいは必要ですが）

昨年、当社は創業75周年を迎えることができましたが、その75年の歴史の1コマ1コマでご紹介した「日飛神社」に象徴されるような時間的、空間的結びつきに支えられて今日に至っていること実感し、その結びつきにかかわっておられる多くの方々の期待にこたえるべく社業をますます発展させていかなければと責任を痛感しています。

ちなみに、今年もまた新たな結びつきに期待しつつ「日飛神社」に詣でることになっています。